おとなから見た子ども

鯨岡　峻

序

M・メルロ＝ポンティは一九四九年から一九五二年までの三学年間、ソルボンヌ（パリ大学文学部）に招かれ、児童心理学と教育学の講義を毎学年週三回、都合七つのテーマについて行なっている。

「おとなから見た子ども」　一九四九―一九五〇年
(L'enfant vu par l'adult)

「幼児の意識の構造と葛藤」　一九四九―一九五〇年
(Structure et conflits de la conscience enfantine)

「幼児の心理＝社会学」
(Psycho-sociologie de l'enfant)

「意識と言語の習得」　一九五〇―一九五一年
(La conscience et l'acquisition de langage)

「児童心理学の方法」　一九五一―一九五二年
(Methode en psychologie de l'enfant)

「幼児の対人関係」　一九五一―一九五二年
(Les relations avec autrui chez l'enfant)

「人間の諸科学と現象学」　一九五一―一九五二年
(Les sciences de l'homme et la phénoménologie)

本稿のテーマ『おとなから見た子ども』は初年度の講義題目からの借用である。これらの講義は、学生のとったノートにメルロ＝ポンティが目を通すというかたちで逐次プリントされ、ひき続いて Bulletin de psychologie 誌に掲載された。そして、彼の死後一九六四年になって、Bulletin de Psychologie 誌の特集号[註1]として一冊にまとめられ、公刊される運びとなった。これら七つの講義録は、後日、『ソルボンヌ講義録』として邦訳出版される予定である。

ある受講者の証言によれば、『行動の構造』と『知覚の現象学』の著者の講義が哲学ではなく児童心理学と教育学であることを知ったとき、受講者たちは一様に驚き、意外の感を抱いたという。[註2]

だが、先の二著が何を狙い、いかなる手続きに依ったものであったかを考えるなら、彼がソルボンヌにおける講義で子どもに焦点を合せたことは驚くにあたらないし、むしろ当然であったとさえいえる。実

際、先の二著によって彼が目指したのは、あまりにぴったりと世界に取り込まれているがゆえに不可視になっているわれわれの実存の意味を、現象学的反省の手続きによって明らかにし、われわれの実存を黙したままで支えている諸次元を明るみに出すことであった。またその現象学的反省は、まずもってわれわれの実存にかかわる心理学的、精神病理学的な諸事実に赴き、その意味を捉え直すという仕方で進められたのであった。そして、そこでは、障碍のゆえに世界への内属的な関係が侵され、かえって実存の諸次元が可視的になっている病者が特に重要な位置を占めていた。つまり彼は、われわれのいわば変異体としての存在者たちを訪ねて、そこにわれわれの実存の真の意味が自ら開示されてくるのに立ち合おうとしたのである。だとすれば、次に子どもという領野を経由して、そこからはじめて切り開かれてくる、おとなとしてのわれわれの実存の意味に立合ってみようとするのは、彼にしてみればきわめて自然なことだったのではないだろうか。

彼は七つの講義を通して、いろいろな角度から子どもを見ているけれども、その中でも特に「おとなから見た子ども」、「幼児の心理＝社会学」、「幼児の対人関係」では、S・フロイト、J・ラカン、M・クライン等、精神分析諸家の思想を紹介しながら、子どもの対人関係、つまり子どもとおとな、子どもと親の関係に照明を当てて論じている。もっとも、講義録の表面しか読まなければ、彼の講義は諸家の思想の紹介にすぎないという印象を受けるかも知れない。しかし、諸家の思想を切り取るその仕方、その目のつけどころに注目するならば、そこにはおのずから彼の基本的視点が浮び上ってくる。もちろん、「おのずから」とはいってもそこに筆者の「読み込み」があることは否定できない。そのことをふまえた上で、筆者に読み取ることができたかぎりでの、メルロ＝ポンティの基本的視点を紹介しておこう。

一、子どもは決して閉じた「対象」ではない。子どもの発達はおとなとの関係の中で考えられなければならない。

二、子どもとおとなの関係は、たとえおとなの側の働きかけが圧倒的に優勢であるにしても、子どもがただそれを甘受するだけの一方的なものではなく、相互的な、しかも常に葛藤を含んだ関係である。

三、同一化もまた相互的であるから、子どもの問題はただちにおとなの側にはねかえる。つまり子どもは、おとなの側からすれば問題性そのものである。

四、子どもの発達は、先取りと退行によって特徴づけられる。

五、子どもの発達は、自分の責任において処理する世界が拡がっていくという点でみれば自由を得て豊かになっていく過程であるが、社会化されるという側面からみれば、可能性を奪われ、鋳型にはめられ貧困化していく過程でもある。

こうした指摘は、現象学的反省からすればごく当然の、そして一旦指摘されてみればほとんど自明とさえ言えるほどのものかも知れない。また今日盛んに取沙汰される登校拒否や家庭内暴力など、情緒発達障碍にかかわる諸研究や、躾、育児などをめぐる親子関係論との関連においてみれば、これらの指摘は別段目新しいものではないかもしれな

い。そして、ラカンやクラインの名前さえ、早期幼児期研究の枠内ではもはや耳新しくなくなっている。

しかし、ひるがえって考えれば、こうした発達心理学の今日的状況が実に三十年も前に先取りされて論じられていることになるわけであって、だからこそわれわれとしては、改めてこの講義録の今日的意義と彼の着眼の確かさに瞠目せざるを得ないのである。

講義録の評価、位置づけは邦訳出版後の課題ということにして、本稿では、子どもの発達の問題に具体的に取り組む手はじめとして、これらの講義録から得たいろいろな示唆をもとに、私見をまじえながらいくつかの視点を素描してみることにしたい。

一　子どもを見る——何が見えるのか

(一)　予備的考察

(イ)　「見る」の二つの様態

幼稚園や学校の教師が、また臨床にたずさわる者が、そしてさらには家庭の中の親が子どもを把握しようとするとき、子どもは見る者の外に、まなざしの対象として、その意味では物と同じ資格の存在者として語られるのが常である。「私がその子を見る」ということ、つまり能動的な知覚主体としての私が、私のまなざしにさらされる子どもを見るという枠の中で、子どもの何がしかの真実に到達できるというわけである。

子どもを見るのは他ならぬわれわれなのであるから、上記のことに問題はないように見える。そして、この私の目に見えた通りのものが真実なのだということも、疑いをさしはさむ余地がないように思われる。

要するに、目をあけていれば対象は見えるのだし、その見えたものが真実なのだ、という素朴な信念があるわけである。

ところが他方では、子どもに日常的に接し、子どもをよく見ているはずの教師や臨床家たちの中から、「子どもがなかなか見えない」とか、あるいは逆に「ようやく子どもが見えるようになってきた」というようなことが聞かれる。あたかも、目を開けているだけでは何も見えず、子どもの真実をみるとは目に映る以上のものをみることであって、そこには一種独得の秘儀があると言わんばかりである。

こうした、素朴な「見え」への疑問とも受け取れる発言は、それはそれで「真実は目に見えず心の目に見える」という、もう一つの日常的な信念に結びついている。目に見えるものは仮象であり、まやかしであり、真実はその背後にあるというわけである。たとえば、オイディプスが最後にみずからの眼を突くことのうちに、そして賢者テレシアスが盲人であることのうちにこうした信念が表明されている。

さて、われわれは「見る」にかかわる一見したところ相容れない二つの日常的信念に行きついた。これらは、「見る」ことが主題化されるいろいろな場合に様々な形をとって現われてくるのだけれども、その乖離は十分に対自化されないのが実情である。そのような乖離をはっきり見定めるためにも、さしあたってはこれらの信念がどのようなところから出てくるかを了解しうるかたちで論を進めることにしよう。

まず、第一の信念に直接結びつくような「見る」の様態を記述してみよう。

私は傍にあるコーヒー・カップに目をやる。その形、色、模様、つや、把手のまわりの汚れ、飲み口の染みなどがありありと溢れるように見えてくる。それらの性質は、私がそう見ようとしたからではまったくなく、私には一切無関係に、見られる対象そのものの特性として、そこに在る。このコーヒー・カップは、私が幻覚剤でも飲まぬかぎり、これ以外に見えるはずがない。

こうした「見る」は、私の外にある対象をむきだしのかたちで見るという態度によって支えられている。（註3）つまり私はもっぱら見る主体であり、見られる物はあくまで対象であって、そこには対峙の関係しかない。もっぱら見る主体としての私は、見るという肥大した知覚意識そのものだといってよい。しかし、「見えるもの」はここでは対象に固有のものなのであるから、「見る」という行為の発端に私のイニシアチブがあるにしても、それ以後は私は対象から送り込まれてくるものをただ忠実に受け止めるだけの受動性に捉えられてしまう。諸々の特性が溢れ出てくるのは、私のせいではなく、対象のせいであって、私はそれらを見させられてしまうとさえ感じる。そのうちに、見るのはこの私なのだという意識さえ地平意識となって、「私はXを見る」というより「Xが見える」という記述の方がふさわしくなってくる。

いうまでもなくこうした「見る」の様態は、まさに知覚心理学がとりあげるような、物（刺激）と私（網膜）との間でとり結ばれる対象知覚の様態である。「見る」を始動させたのはこの私であることは確かなのだが、対象が≪見るもの―対―見られるもの≫という対峙関係の中に入ってしまえば、それ以後は、私は眼にまで還元されて、対象から送り込まれる光刺激によって一切の見えが決定されてしまう。したがって、私に見えるものと他者に見られるものの異同ということも、網膜像の異同によって決定されてしまうことになる。ここに第一の信念が生まれてくるわけである。してみると、第一の信念は、網膜像の発見以来今日では常識とさえなった、網膜像による知覚の素朴な説明を内に含んでいるといえるだろう。

ともあれ、ここでは、われわれの「見る」の様態の中には、対象を私の外にあるものとして、むきだしのかたちで克明に見るという場合があることを確かめれば十分である。

さて、次には第一の信念をゆるがすことにつながるような「見る」の様態を記述してみよう。

見る主体にとって、現に見えているものは「ゆるぎない真実」なのだから、第一の信念は、他者の「見え」と付き合されないかぎりは、常に見る主体につきまとうものである。誰しも、自分に現に今見えているものが他者にはそう見えないだろうなどとは考えない。

けれども、われわれはいろいろな場面で、自分にはまさにそのように見えたものが、他者によって必ずしも承認されないという事態に出くわす。翻って言えば、対象知覚の事態では自分のみえと他者のみえとの異同が主題化されないからこそ、第一の信念が生まれてくるのだといってもよい。

まず、先の場合のように、見る方が一方的に見て、対象が送り込んでくるものを認知し認識するだけ、というのではない事態、つまり、

《見る――見られる》の間に相互的な関係があって、見られるものが認識されるというより、まなざしが生きられるというのが当をえているような事態を考えてみよう。

たとえば人を見る場合である。この場合にも、第一の知覚態度に従って見ることはありうる。われわれは時に人を物の位相にまで突き落とすことがあるからである。物陰から相手に気付かれずに一方的にこちらが見る場合、あるいは、ワンサイド・ミラーを通して相手に気付かれずに観察する場合[註4]、そして恋心がすっかり冷えきって、相手がうとましく思われるとき、あるいは地位関係や力関係をカサにきて相手を見下すとき、等々。いずれの場合にも、見る側は一方的に見るだけで、自分は見られるものではないか、あるいは見られることへの気遣いが問題にならないかである。つまり、そこには《見る―見られる》の相互性がなりたっていない。

しかし、一般には、自分の周囲にいる人を物のように見ることは難しい。見ること、あるいは見られることを気遣う必要がないと思われるような、自分の子どもを見る場合でさえ、まなざしとまなざしが触れ合うとそこに奇妙な感応が生じてしまうものだし、まして熱いまなざしを交わし合う対(つい)の間柄では、むきだしの所与が遂一意識化されるよりも前に、そこにまず或る感情が湧き起ってくるのが普通である。

このとき、知覚主体の側に湧き起ってくる可愛いとか優しいという感情は――そう言ってよければその知覚の意味――は、当人には所与として、つまり自分の主観によるのではなく、自分に見える者の属性であるかのように感じられる。いまこの目に見える人が可愛いかったり優しかったりするのは、その子が可愛いから、その人が優しいからであり、私はただ自分の眼にそれを映しとっているだけだといわんばかりである。

しかしながら、第三者が自分とまったく違った風にその見られる者についての見えを表明してみせるとき、われわれは「意外だ」という感じを持つ。自分の目がおかしいのか、彼の目がおかしいのか、というわけである。こうしたときこそ第一の信念が揺らぐ時なのだが、逆にみれば、それまでは第一の信念が黙したままで自分を捉えていたことを意味しよう。

こうしてわれわれは、見る主体が一方的に見るむきだしの対象知覚という意味での「見る」の様態と、見る者と見られる者のまなざしが感応しあってそこに惑る意味が生みだされるような「見る」の様態とが異なるということを、まず確認することができる。前者は第一の信念に矛盾せず、後者はそれを揺がす機縁となる。

さてわれわれは、この二つの「見る」を、まずもってまなざしの一方向性と両向性とによって区別したのであったが、見る者が一方的に見る場合と、見られる者でもある場合との違いを今少し突っ込んで考えてみよう。

先にも述べたように「見る」ということには常に受動性が刻印されている。それというのも、われわれは恣意的に見ることはできないからである。今見ている者にとっては、そこに主体的契機が関与しているなどとは到底思われない。見る主体に自由があるとすれば、眼をあけているかつぶるか、まなざしを向けるかそらすかぐらいのことであって、見る主体が記述主体であるかぎり、見られるものはまさしく、そこにあるというかたちで見られ、記述される。

だがここでの問題は、見る主体のまなざしが見られるものに固有のものに向かうのか、つまり第三者からみてもそこにあるものに向かうのか、それとも第三者には必ずしもそうは見えないものに向かうのか、という違いである。まなざしの行きつくところを意味というなら、前者は対象に貼りついた皮膜としての既成の意味を読み取る場合の「見る」であり、後者は、見るものと見られるものとの関係の中に或る意味が生まれてくるという場合の「見る」である。

前者の場合、第三者からみても見る主体の主体的契機は問題にならない。というのもこの場合の見る主体は、もはや願望や興味、関心などを抱く欲望の主体ではないし、また喜こびや恐怖を感じる感情的主体でもない。それは、そういう主体的契機が全て還元された、透明な――したがって見られることを配慮することさえ不必要な――もっぱら観照して認識するだけの存在である。

他方、《見る―見られる》の関係性が成り立つための条件を考えてみると、見る主体の主体的契機を考えざるをえない。というのも、見られるものが見る主体の広義における欲望（つまりあらゆる人間的感情を生みだす母体）の暈の中に取り込まれるか否かによって、この関係性そのものの成否がきまるからである。そして欲望の暈の中に入り込んでいるからこそ、見られるものは認識されるものである以前に、見るものの側にいろいろな感情をひきおこすことにもなるのである。実際、人を物のように見ることができないということは、感情的なものの介入なしに人を見ることができないというに等しい。

こうしてわれわれは、見るものと見られるものの関係性として成立する「見る」の様態を経由することによって、ようやく、見る主体の関心、欲望の領野にまでたどりついた。

(ロ) 知覚の相貌性

ところで、従来の知覚研究の枠の中でも、主体の欲望、関心が取りあげられなかったわけではない。たとえばニュールック派の人々、とりわけブルーナーとグッドマンの行なった有名な実験[註5]が直ちに思い出されよう。けれどもそこでは、欲望や関心は「真正の」知覚を歪曲、変形するものとしてしか考えられていない。したがって、「見え」は誰にも同じだが、人によって「解釈」が異なるのだとか、いや「見え」も変化したのだとかいう議論に終始してしまうことになったのである。

これとは対照的に、知覚主体の欲望、関心、感情など、広義の情動過程が知覚過程と不可分に複合していることがあることを強調したのは、H・ウェルナー[註6]である。彼の理論に従えば、精神機能が高度に分化した高次水準では、知覚機能と情動機能ははっきりと分化しているけれども、低次水準ではそれらは未分化で本質的に複合しており、どこからが知覚で、どこからが情動かを語りえないという。さらに彼の理論のもう一方の軸である階層的統合の考えによれば、発達の途上で低次水準は廃棄されるのではなく、保持され、その上に高次水準が階層化されていくとされる。そうしてみると、おとなの場合、条件によっては、諸機能が完全に分化して、知覚機能を単独で語りうる場合があるけれども、また条件次第では、低次水準が活性化して、知覚機能と情動機能が融合し、いわば共通感覚的に機能してしまう場合もあるということになる。

有名な子どもの相貌的知覚の例、たとえば、倒れたコップを「コッ

プがくたびれた」とか、割れたビスケットをみて「ビスケットがかわいそう」というような例は、彼の理論からすれば、低い心性レベルにおける、知覚機能と感情機能の本質的な複合性を示すものである。そして彼は、こうした子どもの表現は一定の知覚に対して事後に与えられた解釈などではなく、まさにそのような相貌の下に見えたことの直接的な表明である、と主張するのである。

彼の理論は、知覚過程と情動過程を別個のものとして切り離しておいてそれらの相互作用を考えるような、いわゆる相互作用理論ではない点に留意しよう。相互作用理論は、網膜像が同じであれば同じ「見え」がもたらされるというあの第一の信念にとらわれているのであって、だからこそ、相貌的知覚は判断（解釈）なのか、「みえ」そのものなのかという議論が惹きおこされることにもなるのである。

ところで、ウェルナーの指摘した相貌的知覚は幼児の知覚の特徴としては広く認められているけれども、その意味は十分に理解されていないように思われる。われわれはここで、心性レベルが高次であるか低次であるかという議論は一応おいて、彼の理論が知覚機能を他の機能から分離して語りうる場合を一方に認めながら、他方では知覚機能と情動・欲動機能が不可分に融合した場合を包摂しうるという点に注目したいと思う。つまり、彼の理論を布衍していけば、われわれおとなの「見る」行為は、ある時には純粋な知覚機能そのものによって担われ、またある時にはどこまでが知覚でどこからが情動や期待なのかを語りえない複合した機能に担われることがあるということ、要するに、日常的な生の中ではわれわれは対象知覚的な「見る」[註7]の様態と、相貌的な「見る」の様態を行き来しているということになる。

対象知覚的な「見る」とは、彼の理論からすれば機能分化の究極の姿であり、層をなしている心性レベルの最上層部の機能の現われである。さらに言えば、この「見る」は、われわれが、「物を観察し、それを知る」という実存の在り方に身を委ねたときに、われわれのまなざしが自ら取る知覚の様式だといってもよい。

これに対して相貌的な「見る」は、諸機能の複合した共通感覚的な「見る」であって、決して子どもにのみ特有の様式なのではない。われわれが「観察し、それを知る」という実存の在り方を廃棄して、「見られるもの」をおのれの関心・欲望・感情の暈の中に引き入れ、それを生きるという態度をとりさえすれば――そうはいっても、見る主体にはこれは当の主体のそのような意図によるというより、「見られるもの」の側からいわば誘われ、働きかけられた結果だと感じられよう――、見るものと見られるものの間に独得の感応が生じて、そこに或る「相貌」が現出するのである。[註8] 子どもの知覚の方がわれわれおとなの知覚よりも相貌的だとすれば、それはただ、子どもはおとなのように他から切り離された単独の知覚機能に身を委ねることが少ないからであり、また網膜像神話の影響下にないからである。われわれとても、夕暮れ時、茜色に染まった空にすっかり心を奪われてしまう時があるのだし、強風のために折れた木の幹を痛々しいと感じることがあるのである。そして、子どもの相貌的な知覚をわれわれおとながなるほどと思えるのも、われわれのうちに潜勢している複合した心的機能に身を委ねれば、そこに子どもと同じ相貌があらわれてくるからに他ならない。

たしかに、こうした知覚の相貌性は従来の知覚研究の枠の中には収

まりにくい。なぜなら、知覚心理学では一般に、まず見られる対象（遠刺激）があって、それが知覚主体の感覚器（網膜）に作用を及ぼし、その結果ある「見え」がもたらされ、その「見え」に基づいた一定の判断を経由してある行動が生じる、と考えられているからである。この考えからすれば、外的条件が同一なら、対象が感覚器を媒介する過程は生物学的にみて万人に同一であろうから、その結果得られる「見え」は万人不変のものとして成立していることになる。割れたビスケットは万人に共通した一定の「見え」をもたらすはずで、ただ子どもの場合には情動に深く捉えられてしまうから、そうした見る主体の側の要因がその「見え」あるいは「判断」に若干の修正、変容をもたらしたのだ、というわけである。

けれども、このような知覚研究の枠組を括弧に入れて、もう一度われわれの「見る」行為に帰還するならば、これまでの考察からも明らかなように、むきだしの対象知覚的な見る態度というものは、むしろ「観察し、認識する」ことに中心化された態度であり、流れゆく生から遊離した特異な、そう言ってよければ特権的な態度なのだということがわかる。われわれの日常的な生のなかでは、おのれをもっぱら認識するだけの存在や刺激の情報処理体にまで還元することはまれなのであって、われわれはまず、興味をもち、関心を抱き、欲し、期待し、ある感情をもって生きている。だとすれば、われわれの日常的な生のなかでは、知覚はむしろ本質的に興味や関心や欲望や期待や感情によって貫かれていると考えられるから、われわれの「見る」の様態は、基本的には相貌的なものだということになろう。

むきだしの知覚があって、それが何がしかの相貌をまとうと考えるのではなしに、むしろ知覚は本来的に相貌的、つまり感情価を含むものであって、ただ生から遊離した特権的な事態にあっては、そうした主体的契機が括弧に入れられた知覚が可能だという風に考えるべきなのである。あるいは別の言い方をするなら、「見る」とは基本的に知覚主体の実存の全幅を賭しての行為であって、ただ、そうした主体が還元につぐ還元を被むった後には、見るということが眼球の機能にまで還元されうる、ということなのである。

今やわれわれは「見る」という行為が対象とこの眼とによって取り結ばれるものどころか、まさに私の実存――つまり私がこの世界の内にあって生きていることのすべての意味――によって貫かれたものだということができる。私に「見えてくるもの」とは、そうした私の実存に張り巡らされた不可視の諸次元を背景とし、それらの上に浮かびあがってきたものに他ならない。そうした諸次元は、当の主体には必ずしも対自化されないままに、そのつどおのれのまなざしに一つの構図をとらせ、方向づけを与えるのである。見る主体にはどれほど自明かつ「自然に」見えてこようとも――したがってそこに他者にも当然このように見えるはずだという信念が入り込むわけだが――その「見え」は実は常に主体の実存全体の作業としての図化作用の結果なのである。主体の図化作用などといった言い方をすると、主体的契機が強調されすぎて「見えるものは主体の恣意にゆだねられているのか」という反論が返ってきそうだけれども、もちろん、主体の思い通りに見ることができるなどということはできない。その意味において、知覚の中核には受動性が、被規定性が、あるいは「むきだしのもの」という考えに通じるある意味での所与性があるといってよい。だが、その

ようなある意味での被規定性、所与性は、破線で描かれた輪郭のようなものなのであって、そうした輪郭に実質を与えるのは何といっても主体の実存の様態である。見るという行為は、視覚を足場にしながらも、実存の諸次元に貫かれているからこそ、視覚の障碍は実存そのものをゆさぶるのだし、逆に実存の張る次元が崩壊するときまってその反響が「見る」行為にも現われてくるのである。

いまやわれわれは、「むきだしのものの知覚」というのは、私の実存が還元を被むって、《私》が眼球と大脳の視覚領にまで捨象された場合の知覚であるとさえ言うことができるだろう。

こうしてようやく、この私に「自然に見えてくるもの」、したがってさしあたって私には所与としか思えず、そこに私の実存の諸次元の糸が張り巡らされているなどとは到底思えないその「見えるもの」が、実はこの私の実存によって方向づけられていること、それゆえ第三者からは「解釈」だと思われるような側面を持っていることがわかってくる。

さて、先に子どもの相貌的知覚の例としてあげた「ビスケットかわいそう」が、子どもの「見え」なのか「解釈」なのかという議論を、ここでもう一度考えてみよう。この表現はウェルナーの言葉でいえば、その子どもの複合した心的機能の所産であり、われわれの言葉でいえば、その子の実存から切り出されてきた図化作用の結果である。そして実をいえば、「かわいそう」という相貌はここではどこにも定位できないのである。この子はビスケットの上にそういった相貌が付着しているのを見たわけではないだろう（そうであるなら、それは対象知覚と何ら異ならない）。しかしだからといって、割れたビスケットにまったく相貌性を感じないおとなと、「見え」が同じだったとも言えないだろう。ここでは知覚機能と感情機能は複合していると考えているのだから、「見え」というにしてもおとなと同じ意味での「見え」はそもそも語りえないはずなのである。見られるものの相貌と言ってしまうから、その相貌はあたかも見られるものの属性であるか、そこに付着したものであるかのように思われてしまうが、そのように見ないおとなもいる以上、見られるものの属性ではない。まさにこの相貌は、ビスケットとその子どもの間に生まれ、その子のまなざしによって生きられたのであって、その子の中にも、ビスケットの上にも定位しえないのである。

逆に、その子どもと同じような図化作用に従わない者には、まさにそれは「割れたビスケット」にすぎない。しかしその人にしてみても、おのれの知覚はあくまで真実なのだから、その子は、自分と同じ「見え」に解釈を加えたのだとしか言いようがあるまい。けれども、そういってよければ、この人もおのれの「解釈」を披瀝しているのである。言い換えれば、彼は、万人に共通なのは「割れたビスケット」であり、それこそが真正な知覚であるという判断を下しているわけである。

なるほど、対象知覚的態度の下では、誰もが共通の「割れたビスケット」を知覚するだろうから、そういう「見え」を万人に共通の「不変項」と呼んでも差しつかえない。そしてそれとは逆に、「かわいそう」という相貌は、おそらく誰もがそれを生きるというわけにはいかないだろう。それは見る主体にも、見られるものにも定位されえないから、測定の網にかかることもありえず、したがって「曖昧なもの」

として実証主義の枠外にはじき出されることであろう。

しかしながら、われわれとしては、この「曖昧なもの」がそれを生きる主体にとってやはり真実なのだということを認めようと思う。なぜならそれは、「曖昧」なるがゆえに測定にさからうとはいっても、公共的な了解性まで禁じられているわけではないからである。そして論点を先取りして言うなら、われわれは己れの実存の刻印を押されたそのような「曖昧」なものの中に、その「曖昧さ」の根拠を訊ねていかなければならない。そのとき、「見るとは眼に見える以上のものを見ることだ」という謎めいた一文の意味もわかってくることだろう。

(二)　観察すること

子どもを取り巻く様々な現場で、「子どもの観察」ということがしばしば話題になる。それは幼稚園における保育分析のデータ収集が目的であったり、自閉児に対する働きかけの効果を見定めるためであったりというように、観察の対象もその目的も多様である。

以下、こうした子どもの観察、記述にかかわる問題点を前節での考察と関係づけながらみていくことにしよう。

一般に幼児教育や臨床に従事している人々からよく言われるのは、「記述の主観性を排除するための方法論、数量化の方途」についてである。こういった必要性が感じられるのは、研究発表の場における「それはあなたの主観的な見方ではありませんか」という、それだけでは無内容な、しかし当事者には何とも後味の悪い質問をあらかじめ予想してのこともあれば、あるいはもっと真面目に、実証主義精神に忠実であろうとしてのこともあろう。それはともあれ、われわれとしては、一部の人々には強迫観念にさえなっている「主観性脱却、客観的データの収集」という観念に含まれているいくつかの予断を、ここで指摘しておかなければならない。

心理学は今世紀の初頭に、認識主体の内観を克明に記述するという従来の内観主義の立場から、客体としての被験者の「行動」を記述するという客観主義の立場へと「転回」し、ようやく行動の科学になったと言われている。その客観主義の要請からすれば、認識対象は常に認識主体の外になければならず、またこの認識主体は何人によっても代置されうる存在でなくてはならない。つまり、認識主体というのはここでは特定の個人ではなく万人がその位置に立つことのできる理念的存在であると考えられているわけである。したがって、具体的個人としての観察者や実験者は、おのれの主観性を一切排除しつくした、いわば透明な存在、外にある認識対象をあるがままに映しだすだけの鏡だということになる。前節との関連でいえば、観察者はおのれの主体性を徹底的に還元して、眼球と大脳の視覚領をもって対象に臨む存在になる、ということである。

ここでは、各自を眼球の視覚領にまで還元しきれば、いかなる観察者であれ、そこでは全く同一のものが捉えられるはずだ、という風に考えられている。換言すれば、観察者がおのれの固有性を排除し、いわば無化されることによって、客観的、公共的な認識が得られるというわけである。

こうした戦略を無意味だとは言うまい。この戦略は事物の世界を認識するのに有効であったのだし、また人間の世界においても、眼球と

視覚領にまで還元された世界がいかなる世界であるかという問いが禁じられる理由はないのだから。そして従来心理学はこうした戦略を至上のものとしてきたのである。

こうした戦略の上に立つならば、実際に実験したり観察してみなくとも、誰かが行なった実験につきしたがうだけで、誰もが——潜在的、可能的には——同一の認識に行きつくことができるはずである。設定された一定の条件の下で、これこれの結果が得られたという主張に接するとき、その論文で用いられている用語がすべて操作的に定義されているなら、権利上は、われわれはその実験とまったく同じ事実に行きつかなくてはならない。

だが、原理上は可能なはずのことが実際には必ずしもそうはならない。このことは追試をしてみればよくわかる。人の論文を読んでなるほどと得心して後の追試でさえ、オリジナルの実験とのズレが感じられることが多いのである。もちろん、このズレには「操作上の諸問題」が大きくかかわっていることが多い。しかしそれを差し引いてもなお、ある特定の認識主観（実験者であって論文報告者）の語る現象と、追試を通してこの私が現に今立ち合っている現象との間に、何かしらのズレが感じられるのである。この事実をただ単に、それぞれの具体的な認識主観が透明になり切れず、操作が不徹底で主観が入り込んだということのせいにすべきなのだろうか。楽天的な実証主義者ならこう言うかも知れない。「心理学的認識というものは、そういう具体的な個々の認識主観のぶつかりあいを通して純化されていくものであって、一つの認識が真理として定着するのは、そういう認識のぶつかり合いの後に不変項が残ったときである」と。

公共的認識が個々の認識の彼岸にあるという考えはおそらく間違いではあるまい。けれども、先の主張が正しいとすれば、具体的な個々の観察者や実験者は、少くともその時点では遺憾ながらおのれを還元しきれず、個人的要因の介入の可能性を拒みえないということを認めることになろう。そうしてみると、具体的な観察者を一挙に公共的認識主観の位置におきえないということにもなる。

だが、真の問題はそうした還元が不完全にとどまらざるをえないという事実、客観主義が不徹底に終らざるをえないという事実にあるのではない。むしろ問題なのは、同じ現象に立ち合いながら、その現象の切り取り方が個々の研究者において微妙に異ならざるを得ないという点なのである。現象の切り取り方という言い方をしたけれども、個々の研究者には、その現象はごく自然に「見えるもの」なのであるから、切り取ったという意識は生じないだろう。だが前節でも簡単にふれたように、ある現象を図として切り出すのには、大袈裟に聞こえるかもしれないが、その認識主観の実存全体が総動員されている。過去の経験、人間観、児童観など、子どもを見るというその現場では主題化されることのない個人的諸要件が、潜勢したまま背景となり、そうした背景の上に、ある現象が「図」として浮かびあがってくるのである。[註9] そして認識主観の実存の様態がそれぞれに異なるからこそ、微妙な点で研究者間にくいちがいが生じてきてしまうのである。

こうした点を、観察の方法論としての「チェック・リスト法」についてもう少しみてみよう。チェック・リスト（あるいは何らかのカテゴリー・スケール）が作られる理由は、(イ)、記述に用いられる用語に入り込む主観性を排し、(ロ)、詳細であるかもしれないが膨大なものに

ならざるを得ない資料を縮約し、(ハ)、資料を数量化して表現する上に都合がよい、からだといわれている。そしてこのチェック・リスト法が重宝がられるのは、この方法がある点で科学主義の要請を満たしているからである。即ち、あらかじめ観察項目を定め、それに該当する行動が生起したかどうかを一定の時間帯の中でチェックすることによって、「観察主体の主観に左右されずに」「誰が観察しても同じ結果がえられる」と期待されるからである。

たしかに、記述に日常用語を用いて子どもなどの観察対象を記述するとき、そこに研究者個人の独得の意味が込められてしまうということは大いにありうるから、そのことが共通理解の妨げになるという可能性は否定できない。けれども、あらかじめ定義されたチェック・リスト項目（あるいはカテゴリー）なるものも、決して一義的なものではない。微妙にニュアンスの異なる資料を縮約するという第二の要請のために、項目それ自体にかなり幅広い概念規定しかできないことが多く、したがって肌理粗くみれば同族性を示すように見える二つの行動が、実は質的に異なるという場合も生じうる。しかし、だからといって項目数を増やしていくと、チェック・リストの長所が失なわれてしまう。それに、ある行動を当該の項目に入れる入れないの判断の水準で、すでに相当量の曖昧さ――そういってよければ主観が――入り込んでしまうのである。もちろん、こうした難点は、認識の運動による軌道修正という先の論法によって、あるいは複数の観察者による評定の一致度とか、観察者の評定の確信度などという数量的な表現によって、ある程度解消されるであろう。けれども観察経験の乏しい初心者がチェック・リストを用いて行なった観察結果の信頼性が低く、経験豊かな者の観察結果の信頼性が高くなるという事実は何を物語っているだろうか。もしチェック・リスト法が「誰が行なっても同じ結果をもたらす」全く客観的な方法であって、観察主体の主観に左右されないものならば、そういうことにはならないはずである。それゆえ、そういう事実がある以上は、チェック・リスト法といえども、そこにある種の主観が入るのを免れえないといわなければならない。

そうしてみると、日常用語による詳細な記述が主観的で、チェック・リストが客観的だという主張はかなりずさんな議論だということになる。日常用語に込められるかも知れない主観性なるものは、ある行動をいずれかの項目に入れ込むときの主観性と同種のものであって、必ずしも恣意的だとか、でたらめだとかいうるような主観性なのではない。前者が非科学的で、後者が科学的な方法論なのではなく、両者の違いはむしろ研究主体の表現上の戦略の違いにすぎないのである。

実際、学会発表や研究レポートにおいて、研究者間の認識の違いのもとになるのは、何よりもリスト項目の定義の仕方である。そして結局は、当の研究主体から、再び日常用語で微に入り細にわたって、時には身ぶり手ぶりもまじえて説明してもらわなければ、得心がいかないことが多い。

だが、チェック・リストの問題はそればかりではない。

もともとオリジナルなチェック・リストなるものは、特定の観察主体の長年にわたる経験を対象化した結果のはずである。だからこそ、当の研究主体は、そのリスト項目が観察対象の行動記述全体の縮約的表現たりうるという確信、つまり必要にして十分な項目であるという

確信を持つことができるわけである。当の研究主体には、まさにそういう項目に要約表現される行動が、「際立って見えた」わけであろう。けれども、これまで見てきたように、見る主体にきわめて自然に「見えているもの」が、当の主体には必ずしも明瞭に意識されない様々な次元（経験、理論的枠組、人間観や児童観に代表されるその人の欲望の系）を背景として浮かびあがった「図」、暗黙の図化作用の結果だとするなら、その必要十分性は必ずしも普遍的に妥当するものではないだろう。換言すれば、同じ子ども、同じ現象を観察しても、研究者によって切り出すリスト項目は異なる可能性があること、しかもそれはある項目が落ちて他の項目が入るといった部分的な相違にとどまらず、項目の布置そのものが大きく変わることさえありうる、ということである。要するに、各リスト項目は観察対象の全体像把握と内的緊張関係をもっているのである。

こうして、リスト項目が切り出されてくる過程を反省してみると、それはある特定の研究者の長年に亘る個人的経験を対象化した結果であり、場合によっては日常用語ででも記述しうるはずのものを、そのように縮約したものだということがわかる。ところが、一旦リスト項目が一つ一つの項目として分離して提示されてしまえば、それらが切り出されてくるもととなった、当の研究主体による全体性把握は霧散してしまって、あたかも項目それ単独が存在するかのような錯覚が生み出されてしまうのである。しかもそこには、研究者がおのれの実存との関係性の中で捉えたもの、つまり子どもの「相貌」として捉えたものと、観察の対象項目として還元されたまなざしでもって捉えたものとのズレが入り込む。多くの研究者はチェック・リストに縮約した結果、自分の見た子どもが生き生きとよみがえってこないという不満をもつけれども、こうした研究者の苛立ちは、要するにこのズレ、すなわち相貌的な「見る」と対象知覚的な「見る」のズレに由来するのである。したがって、初心の観察者が出来合いのリスト項目にしたがって子どもを見、記録をとって事足れりとしたのでは、決して良い観察は生まれない。なぜなら、項目に従って、ということは、まさに子どもを物のように見るということ、子どもを全体としてではなく、断片にして見るということだからである。初心とはいえ、おのれの目に映じるがままの子どもの全体としての姿をとらえ、それと与えられたチェック・リストによって切り取られる子どもの像との落差を反省してみてはじめて、子どもの捉え方の問題が浮き彫りにされてくるのである。

もしここで認識の公共性について語るならば、チェック・リストの方法がそれ自体客観的で公共性に向かって開かれているという風に考えて自足してしまうのではなく、チェック・リストに集約される個人的経験の真実を各自がもちよってぶつけあい、それを全体化するという意味での、経験の公共化について語るのでなければならないだろう。

これまでの議論は、目に映じるものとしての行動の直接観察から、学校や幼稚園での人物評価へと広げてみると、もって鮮明になってこよう。科学者然として振舞っている人でも、たとえば既存のチェック・リストに従ってある人物を評定せよといわれたとき、おのれの評定が普遍的に妥当するとか、他者の評定と必らず一致するなどとはたいてい確信できず、むしろ人それぞれ主観的な（しかしそれなりに真

実の）判断を下しているのだということを認めることだろう。なぜなら、人物の評定には、判定者の価値観、興味、好みなどが関与してくることを、各自が実感として承知しているからである。評定が他者と一致するのは、自分の評定が正確だったからだというより、人をみる枠組が大体一致しているからであり、評定が違ったとすれば、それはその評定がずさんだったというより、そういう枠組が異なっているからだと考えてしまう。こういうことは、いわば共通認識としてほぼ定着しているのだけれども、いざ目に見えるものとしての行動観察の事態になると、一挙におのれも他者も「透明」になりうるかのように語ってしまう。それはやはり、「目にうつる他者の行動は誰の目にも同じにみえるはずだ」という神話――静観的、認知的な態度を前提すれば正しいけれども、いつもそうだとは限らないという意味において――に捉えられているからに外ならない。

「観察されたもの」が、観察主体にどれほど自明に、所与として映ろうとも、そして誰にもまさにこの通りに見えるはずだと思われようとも、それは、常に主体の暗黙の図化作用の結果なのであり、その意味において、それにはその主体の実存の様態という刻印が押されているのである。

さて、フロイトは「快感原則の彼岸」という論文[註10]のなかで次のような観察結果を述べている。一才半になる幼児が、端に紐のついた糸巻きをベットの向う側に投げ込んでは「オーオーオー」と言い、糸巻きが見えなくなると紐を引っぱって、糸巻きが姿をあらわすと今度は嬉しげに「ダ」と言った、というのである。そしてフロイトによれば、これは、母親が不在になるという苦痛な体験を遊びとして反復したものであるという。この例においても、たまたま偶然そういう遊びが最初何の意味も伴わずにまず観察され、事後にそのような解釈が与えられたというのではあるまい。むしろそのような「解釈」を成り立たせる理論的地平をフロイトが持っていたからこそ、一見とりとめもない子どもの行動が、まさに取り挙げられ記述されるべき行動としてフロイトの目に析出したのであろう。そして、そのように図として浮き出るときには、おそらくフロイトのそのような「解釈」を当然のこととして許すような相貌が伴われていたに相違ない[註11]。仮りに観察者がピアジェであったなら、この子の行動は循環反応の格好の例とみえたかもしれないし、そういう理論的背景をもたない観察者には取るに足らない行動として見逃されてしまったかもしれないのである。観察者に「見えるもの」となっているのは、観察者の側の暗黙の図化作用、主題化作用の結果なのだということを再度確認しておこう。

＊＊＊

こうしてわれわれは、見る主体が決して透明ではないこと、見えるものはその不透明さを背景に浮き出るものなのだということを認めなければならない。そして一度、観察主体が不透明であるということになれば、われわれはその不透明さが何によるものかを問わなければならないし、その不透明さを観察者が対自化しうるような経験をもつための方略を、考えていかねばならないだろう。

かくしてわれわれは、黙したままでこの私のまなざしを支えている諸次元を明るみにだすために、世界にぴったりと取り込まれているおのれを還元し、今「見えているもの」とこの私の実存との間に張りめぐらされている不可視の糸を可視的なものにする作業に取り組まなけ

ればならないことになる。換言すれば、見る者にはまずもって「事象の側からの告知」という風に受け取られたものを、見る者の実存の暗黙の諸次元を背景として浮かびあがった図という風に捉えかえす作業が必要だということである。子どもを観察する主体の側に潜勢的、先取り的に働いている意味了解の基盤がこうして明らかになれば、子どもは常におとなとの関係のなかで見られていること、したがって、子どもは常におとなからみた子どもなのだということ、そして子どもについての認識はおとな自身についての認識と共変するものだということが真に捉えられることであろう。

いうまでもなく、「今見えているものとこの私の実存との間に張り巡らされている不可視の糸を可視的なものにする作業」とは、おのれ自身に現象学的還元を施すということである。この現象学的還元は、観察の実践主体にとっては、一つの視点変更、態度変更といってもよい。

さて、おのれの目に自明なもの、「明証的なもの」として映ったものに還元を施すときには、いつも何らかの抵抗が伴うものである。たとえば、一人の知恵遅れの子どもが、普通児ならば見知らぬおとなの面前で決して言わないような卑猥な言葉を口にしたとしよう。それを耳にしたとき私は不快な気分になり、あるいははっきりと嫌悪感さえ覚える。この嫌悪感はどうしようもなく私を訪れてきたものである。そして、その子の行動の意味を了解するために、この嫌悪感を「括弧」に入れて視点変更を行なおうとするとき、私にはまず一種独得の抵抗感が感じられる。だが、その抵抗に打ちかって視点変更（態度変更）がなされていくと、その嫌悪感のよってきたるゆえんが――知恵遅れの子どもの側の問題と私の側の問題が同時に――次第に明るみに出てくる。まず一方では、その知恵遅れの子どもが示したそのような社会性の阻害された言動が一体どこから来るのかが問われることになる。こうして、彼がこれまでどのような社会関係の中におかれてきたのか、普通児たちが自然に持つ躾の経験が彼の場合いかに奪われていたのか、等々、その子の生の諸次元がようやく見えてくるだろう。それと同時に、彼のおかれている状況が私の実生活からいかに縁遠いものか、ということも改めて実感させられてしまう。そして私自身の躾の考え方、自分の子どもへの躾の仕方、さらには、われわれおとな社会が子どもにどのような姿を期待しているのか等々、それまで黙したままで私自身を貫いていた私の実存の諸次元が、一つ一つ浮かびあがってくることだろう。

こうして、最初は知恵遅れの子どもと普通児との単純な落差としてしか捉えられなかったものが、実は知恵遅れの子どもたちの置かれている疎外状況の所産であるとともに、私自身の子ども観と障害児観、つまりそういう考えを暗黙のうちに抱きながら生きている私の実存全体の所産なのだということがようやく了解されてくるだろう。そしてその子のそうした言辞が、彼の「本性に固有のもの」などではないことがわかってくるにつれ、彼はそれまでとは異った相貌の下に見えてくるだろう。

要するに子どもは、私からまったく切り離された、単なる認識の対象なのではない。子どもとおとなの間には無数の糸が張り巡らされている。子どもを問題にせざるを得ないというのも、そのように子どもがわれわれおとなの生の領域にかかわっていて、それを揺さぶるから

である。それゆえわれわれは、子どもをおのれとの関係の中でしか見ることができない。われわれがもしその関係を断ち切って子どもを見ることがあれば、それはあくまで、子どもとおのれとの関係を浮き彫りにするための方略としてである。

したがってまた、われわれおとなは子どもを常にある相貌のもとに見て、「むきだしのもの」として見ることができない。そしてその相貌には見る主体（おとな）の実存が刻み込まれているから、見る人によって見える相貌が異なること、つまり図化される子どもの行動が異なることもありうる。言い換えれば、見る主体に「図」として「見えてくるもの」は、見る主体の実存と共変するのである。

そうしてみると、子どもを見ることは、おとなが自分自身を振り返ってみることに通じる。「見えるもの」としての子どもは、そのまま当のおとなの生き様にかかわっているからである。つまり、「おのれの目に見えるもの」の意味を問うことによって、子どもとおのれ自身の実存の意味が同時に見えてくるのである。それゆえ、子どもを見ることは、一面では私の実存に鋭く問いをつきつけるその子どもと共に生きることによって、世界に安住し眠り込もうとする私が目醒めることでもある。この意味において、子どもはわれわれおとなにとって問題性そのものだといってよい。

二　子どもはいかなる意味で主体なのか

これまでみてきたように、子どもはそれ自体で完結した閉じた存在ではなく、われわれおとなとの関係における存在である。では、一体いかなる意味において子どもの主体性を語ることができるだろうか。

誕生後かなり長い間、子どもはほとんど全くおとなに依存し、おとなの養育がなければ生命さえ維持できない状態におかれている。おとなの側はその養育を当然のこととみなし、細かな気遣いと暖い愛情で子どもを包む。そこからおとなには、子どもはおのれの分身、おのれの延長、自分が果しえなかった価値を実現してくれる存在、希望そのもの、といった幻想が生まれてくる。[註12] とりわけ母親の場合には、妊娠と出産という体験と、日々の授乳や排泄の始末などの身体的接触を通して母子一体感さえ生まれてくる。

このように子どもと両親（とくに母親）との間に融合的な関係があって、しかも両親の側からほとんど一方的に働きかけがなされているという状況の下で、どのようにして子どもの主体性について語りうるようになるのだろうか。

これはいうまでもなく子どもの自我の発生あるいは自我の形成と相即する問題である。

さて、母子一体となった融合系に偏極が生じる機縁を考えてみよう。これまで精神分析諸家が明らかにしてきたところから考えれば、その一つは、この《私》（＝自我）の投描点としての自己の身体像の発見であり、もう一つは、他者のものと異なる、おのれの欲望の領野の確認である。

幼児がおのれの鏡像と出合うことのうちに自我の萌芽を見ようとしたのは、J・ラカンである。[註13] 当初、子どもは母親に融合しているために自己の身体の統一性を見出しえない。けれども誕生後六カ月から十八カ月の間（鏡像段階）に、子どもは鏡に映ったおのれの像を見ると

いう具体的経験を通して、おのれの像を《私》として身に引き受けていくようになる。ラカンはこれが後の自我の輪郭となるというのである。

確かに、生後十カ月余りの幼児を父親が抱いて一緒に鏡に映ると、その子は鏡に映った父親をみてにっこり微笑み、父親が抱いているその子の背後から声をかけると驚いたようにふり向く。そして鏡に映った自分の像には困ったような、何とも表現しがたい微笑でもって応える。けれどもしばらくして誕生頃になると、鏡に映った自分の像をみて大変な喜びようを示すようになる（自家観察例）。

われわれは自分以外の人ならばこの肉眼で見ることができるから、幼児が相当早い時期にまず母親を、それから父親を認知できるようになるとしても不思議はない。[註14] けれども、自分の手足や体幹は自分の目でみることができても、自分の相貌を自分の眼で見ることはできない。それ故、生まれて初めて自分の相貌を鏡の中に見た幼児は、まずもっておのれの像を《他者》として経験せざるをえない。そしていずれは鏡の中のその《他者》を、《私》として身に引き受けていかなければならない。ラカンはこうしたことのうちに、自我の萌芽が認められる、というのである。

実際、この《私》がおのれの相貌でもあるからこそ、仮面（ペルソナ）を被って顔を隠せば、違った人格（ペルソナ）として振舞うことができるわけであろう。[註15] その意味で、《私》がおのれの相貌を身に引きうけることのうちに、つまりあの相貌をもつあの者がこの《私》なのだと想い入ることのうちに、他者からこの私を境界づけ、この《私》をその相貌と身体のうちに限局する端緒が切り開かれる。そして、私はその最初に出会われた「他者」へ同一化することによって《私》になってゆくのだけれども、その相貌を引き受ける「引き受け方」というものがあるから、おのれの相貌は《私》の中に深く根をおろすことになる。いわば自我は相貌の中に受肉していくのである。

このように鏡像を経由することによって幼児はおのれの身体を他の身体から区別することができるようになる。そして、自分が「見られるもの」でもあることに気付くことによって、一方の極ではナルシシズムへと、他方の極では他者のまなざしに射すくめられて他者の奴隷へと傾斜していく可能性が生れてくることにもなる。[註16]

ともあれ、自―他の融合系に偏極が生じ、その渦の中心に幼児がおのれを定位するようになるのは、一つにはこれまでみてきたとおり、幼児がおのれの鏡像を生きることを通してであろう。

さて、母子一体となったままの未分化な状況に偏極が生じてくるもう一つの要因は、子どもの欲望の領野と、他者（母親）の欲望の領野とが衝突するようになるという事実である。おのれの欲求や要求がすべて満たされるのであれば、それはそういうものとして意識されることはないし、それらが自他の区別をきわだたせることにつながることもないだろう。しかしおのれの欲望が他者の欲望と鋭く対立するとき、それはそれとして、つまり、「これを欲するのは私であって他者ではない」という風にして欲望の主体に「図」化される。その時、ここにいる自分と、向うにいる他者とが異なる存在だということが実感されるであろう。フロイトの欲動論が教えているのは、人は本来的に欲望をもつ存在であり、人が共に生きるということは、そうした各自の欲望がぶつかりあって生きていくことであって、それこそこの世界の中

で生きる根源的な仕方である、ということである。

だとすると、子どもとおとな（両親）それぞれの欲望が最初にぶつかる場が問題になる。子どもの欲望に対立するおとなの側の欲望を、両親の超自我を通して表現される社会的・文化的な規範、掟――つまり子どもが社会的存在になっていくうえで、個人の快原則に抗して身に引き受けていかざるをえないもの――という風に考えれば、自―他の欲望が最初にぶつかり合う場は、排泄訓練に代表される《躾の場》だということになろう。また、おとなの側の欲望ということを、母親の個人的欲望――彼女の心的コンプレックスに支配された無意識の欲望、現実生活の中から生じてくる彼女に固有の欲望――という風に解すれば、排泄訓練よりももっと早期の、授乳や離乳の場を考えてみなければならないだろう。

アンナ・フロイトとメラニー・クラインの対立に代表されるように、精神分析諸家の間には自我・超自我の形成される時期を巡って多くの意見対立があるけれども、それはつまるところ、自・他の欲望の衝突する場をどこに求めるかの対立であると思われる。

そのような微妙な対立はともあれ、いずれにしても精神分析理論は自・他の欲望がぶつかり合わざるを得ないことを教えている。この理論に従えば、この対立によって、子どもはまず最初、おのれの欲望のままに振舞うか、親の言うことに屈服して言いなりになるかの二者択一をせまられるけれども、いずれ、その衝突の間に狭い隘路を見出し、おのれの欲望と両親の欲望の調停をはかるような審級が機能してこざるをえない。このようにして自我が形成されてくるのだ、というのである。

もちろん、こうした幼ない自我の成立は、自―他未分化な、あるいは自―他の融合した開放系に一種の偏極が生じたにすぎず、子どもはいろいろな面で両親につながっている。けれども、そうしたいわば幾本もの通底器で通じあっているところに生じた偏極の渦の中に、子どもが自らの中心を置きはじめるということ、そこにこそ、子どもを主体として語りうる基盤があるのである。[註17]

子どもはもはや、もっぱら両親の欲望の対象ではない。両親のあらゆる欲望にさらされ、その圧倒的な影響をうけながらも、いまや子どもはおのれの欲望の主体でもある。そして欲望の主体として世界に内属するということは、おのれの欲望を通して世界を見、そのようなものとして世界を切り取ることだといってもよい。仮に、網膜像神話の極点にある「むきだしの、あるがままの無機的世界」を世界というなら、子どもの眼前にくりひろげられる世界は、子どもの欲望によって貫かれ体制化された、有機的な環境世界（Umwelt）だと言わなければならない。これが相貌的な世界だということは、前節でみたとうりである。世界が各自の環境世界であり、相貌的世界であるということは、別の言い方をすれば、世界の主体的な価値づけ、いわば世界の自己化があるということである。

このように、子どもはおのれの欲望の主体であるからこそ、世界をおのれの世界にしつらえていくことができ、したがってまた「個性」を語りうるように、なるのだけれども、しかしそのような自己化がいつも積極的、肯定的な結果ばかりもたらすとは限らない。たとえば、児童精神分析の中でよく話題になる、「子どもの幻想における悪しき母親像」が、子どもから分断された客体としてのその母親の特性によ

って一義的に決定されるとは必ずしも言えず、その母―子関係におけるその子特有の「世界の自己化」の所産としか言えない場合がある。(註18)つまり、現実に「母親が悪いから」とは必ずしもいえないのに、その子の欲望の布置を通してみた母親像は「いけない母親」となってしまう場合が生じうるのである。果して精神分析学が教えているように、実はそこに母親のコンプレックスがあって、彼女が無意識のうちに子どもを受け入れまいとしているから、その子どもがそのような幻想を抱いてしまうのか、それははっきりしない。けれども、子どもがそのような幻想を抱くこと――われわれの言葉でいえば、子どもがそのように世界を自己化すること――があることは確かだといってよい。

そうしてみると、子どもの成長過程がおとなの側（両親）の働きかけによって一義的に決まってしまうものでなく、そこには子どもの主体的契機が含まれているということは、子どもの成長が、両親からの自立、主体的な自己形成という積極的、肯定的な一面をもちながら、他方では両親への不信、不満を増大させる危険な一面ももっていることを意味する。おとなによって足場を与えられ、その生の輪郭を素描されておりながら、子どもはぎりぎりのところでその子独自の世界の切り取り方を示していくのである。いうまでもなく、子どもの不幸は、たとえ直接両親に責任がない場合でも、親がおのれの責任において身に引き受けていかなければならない。それが子どもを持つものの務めである。けれどもそのように納得することと、「子どもの不幸はすべて親に責任がある」としてしまうこととの間には大きな違いがある。子どもの不幸の大半が両親の養育態度にあることは認めた上で、それでも、子ども自身の世界の切り取り方からもたらされる不幸もありうるのである。

＊＊＊

さて、これまで子どもとおとなの欲望のぶつかりあいの中に子どもの自我の発見と世界の自己化の契機を見てきたけれども、この欲望のぶつかりあいは、赤の他人どうしのそれとは明らかに異なっている。子どもからみれば、両親はおのれの欲望をいろいろな点で阻止し、無理難題を押しつけてくる存在であると同時に、安心して身をゆだねられる存在、自分を養育してくれる存在、そして自分がおとなになっていく過程で身につけなければならない諸価値の体現者でもある。したがって子どもは一方で反撥しながら両親に同一化していかざるをえない。つまり子どもは、子どもであることから被むる不幸を乗り越えるには、不幸の源泉たるおとなにならなければならないという根源的パラドクスを抱えているのである。他方、おとなからみれば子どもはおのれの分身であり、希望の星である。そのように子どもをもう一人の自分として同一化しているからこそ、自分が自分の両親から被むった悲しい経験を子どもから遠ざけたいと思うし、子どもが理想的なかたちで育っていくことを願う。けれども、子どもが大きくなって、欲望の主体として世界の中心におのれを位置づけることができるようになってくると、自分の分身であるとか自分の理想の代理人であるとかの幻想は破れる。そして子どもはいろいろな点で自分をつまづかせる存在になってくる。つまり、子どもは他者としてのおとなをわがものとして同一化していくのに対し、おとなは、もともと自分であった者が他者になっていくのをまのあたりにしなければならない。

このように、同一化は子どもからおとなへ、おとなから子どもへと

二重化されているから、欲望の衝突はきわめて錯綜した様相を呈することになる。親と子の間でそれぞれに抱かれる感情が両価的（アンビバレント）にならざるをえないのも、それぞれが相手に同一化しているからなのである。この点は、子どもを叱りつけた後に、決まって何とも形容しがたいみじめな思いに襲われることからもわかる。

けれども、お互いに同一化しあっているとはいっても、各自が家族という布置の中で異なった位値を占めている以上、子どもと親の関係は対等ではありえない。この不平等関係における親の側の圧倒的な働きかけを肯定的に言い表わせば、「子どものため」ということになる。そして一般に親（おとな）はおのれの側の子どもへの働きかけを、概して高く見積もりがちである（自分のこういう行為は子どもによってこのように受け止められているだろうという点について、意識水準の調査をしてみると、子どもの側の親に対する評価よりも、親の側の思い込みによる評価の方が高くでてきやすい）。それゆえ、親（おとな）の側には、子どもとの間に何ら葛藤はないという幻想さえ生まれてくる。しかし、これまでみてきたように、子どもと両親（おとな）の間の関係は本質的に葛藤関係である。子どもは、その誕生の時点から、対（つい）の関係の外に生まれてきた第三者だという点で、夫婦という対（つい）幻想の破壊者の運命を担っている。また子どもは両親の小さな分身であることによって、彼らおとなたちの眠れるコンプレックスを再び賦活する存在者でもある。そして、おとなの物理的な時間と空間に干渉する存在であることはいうまでもない。おとなはおとなで、その置かれた立場からして、子どもに全面的な自由を与えることができず、たえず干渉せざるをえない。いやむしろ、おとな（両親）は本質的に子どもに干渉し、圧倒的な影響を及ぼし、自由を奪う存在なのだといってもよい。ただ、われわれおとなは、そのような働きかけがおのれの置かれた立場からぎりぎりのところで絞り出されてきたものだということ、そして子どもをおのれのコンプレックスや全くの個人的欲望や願望の犠牲にしないようにすることを心がけなければならないということなのである。

このような錯綜した葛藤関係にあって、両親やおとなの側から圧倒的な影響を被むりながらも、一度偏極が生じると、子どもはおのれを世界の中心に置くようになっていく。子どもの精神病理が教えるところでは、自分が世界の中心になることを放棄して、おのれを全面的に親に譲渡してしまい、親からみて全く申し分ない「良い子」になったとき、その子はまさに病的状態にあるのだという。おのれを世界の中心に置き、世界を自ら切り取り、こうして子どもは少しずつ自立し、自由を獲得していくわけだけれども、それはまた自分の責任が次第に重みを増してくることでもある。両親やおとなは、子どもの生を子どもの代りに生きることはできない。生きるのは他ならぬ自分なのだということ、誰も自分に代って生きてはくれないのだということ、子どもは、おとなとの葛藤関係を通してそのようなことを学びとっていかなければならないし、おとなの養育の本質も、結局はその点を子どもに伝えることにある。

要するに子どもは、おとなの欲望の客体であると同時に、おのれの欲望の主体である。そして、子どもとおとなの関係は顕在的、潜在的に葛藤した関係であるがゆえに、おとな（親）である私が、おのれの欲望の領野にかかわりをもつ子どもの問題を見ようとするときには、

まず葛藤関係が、そしてひるがえっておのれの欲望の領野が浮かびあがってくることだろう。子どもはおとなに依存し、おとなの援助を必要としながら、世界を自ら切り取りそれを身に引き受けていく。つまり、子どもは《依存的主体性》という形容矛盾を文字通り生きていくのである。

＊＊＊

さて、これまで子どもの主体性という問題を、主として精神分析学の教えるところに拠りながら、「おとなの欲望と対比された子ども自身の欲望」というパースペクティブからみてきた。子どもの主体性が立ち現われてくる原基として子どもの自我の成立過程に着目するかぎり、こうしたパースペクティブにはそれなりの必然性がある。初期の母子関係を融合的関係と規定する以上、その分離の契機が当然考えられなければならないからである。この欲望の対峙というパースペクティブでは、たしかに自我の成立、自立の過程が主題化され、「図」として把握されやすい。たとえば「三才児」という言葉に象徴される子どもの反抗的自立の様相は、両親の分身幻想の崩壊と表裏になって「見えるもの」になりやすいのである。このような「――に抗しての自立」の強調は精神分析学的自我論全般に亘っていえることである。けれども、そうした「図」は、母子一体性、あるいはその延長としての子どもと両親の精神的靱帯を背景として浮かびあがったものであることを忘れてはならない。もちろん、親子関係が甘い幸せなイメージで語られるのは幻想であるし、本論でも触れたとおり、それは構造的な――そういってよければ本質的な――葛藤関係を内包していて、多くの危険、危機をはらんでいる。それははその通りなのだが、しかし子どもの主体性の発露がすべておとなの欲望、願望、期待と対立、矛盾するわけではあるまい。行動能や学習能に裏打ちされて、子どもが世界の中で自ら進んでき生ることに自信をもちはじめ、世界をわがものにし、自ら進んで事にあたるようになるのは、おとなの願いであり喜びであろう。それすら、欲動論の整合性の為に「幻想」と決めつけてしまうのは一面的である。子どもと親の関係は互いの「受苦」の関係であると同時に「喜び」の関係でもあるからこそ、本質的に錯綜した逆説的な関係なのである。

そうしてみると、これまでみてきたような子どもと親（おとな）の対峙関係においてばかりでなく、子どもとおとなの融合的、共生的な関係においても、子どもの主体性をみてみなければならないだろう。それには、親（おとな）はどのように子どもを受容するのか、子どもはいかに安心して親に身をゆだねるのか、といった共生的なパースペクティブのもとで「子どもを見る」という問題を記述してみる必要がある。この点については稿を改めて論じることにしたい。

註ならびに参考文献

註1、Bulletin de psychologie n° 236 tome XVIII 3-6

註2、前掲特集号の序文 Le versant de la parole の中でH・ダミシュがそのように証言している。

註3、コーヒーカップをまじまじと見る場合、見られたものはこの文脈では「むきだしのもの」と捉えらている。けれども「万人に自明な、身じろぎもせずそこにある、コーヒーカップという名の物」という記述のレベルが、われわれの原本的な世界への内属関係を前提していること、つまり「自然な自明性」を支える《何か》があることは、

分裂病者の体験記述に（たとえばセシュエー著『分裂病の少女の手記』参照）接すれば了解される。日常、目に自然に見えるものは既成の沈澱した意味を皮膜として被って見えてくるのであり、そういう意味次元を支える生の関係が障害されれば、その「自然なみえ」すら破壊される。その意味では、今、まじまじと見られたこの物の様相が真の「むきだしのもの」とは言えない。しかし、本稿ではそうした病的解離状態にまで論及していないので、一応「むきだしのもの」とは、通常の、所与として目に見えるがままのものを意味している。

註4　ワンサイド・ミラーを利用した観察はよく行なわれており、そこからみえる子どもの様相と、子どもと一緒に遊んでいるときにみえる子どもの様相が違うことは良くしられている。しかしその落差の意味を十分見極めるには、おのれのまなざしの様態の変化を解明しなくてはならないだろう。

註5、Brunner, J. S & Goodman, C. C. Value and Need as Organizing Factors J. Soc. Abn. Psychol, 1947.
この実験ではコインの見かけの大きさを白い円板に移し変えてその径（Q_1）を測定し、コインの実際の径（Q_0）との差（$Q_1-Q_0=\Delta Q$）を過大視の量とみている。けれども、見かけの大きさを円板に移し変える操作は、生きられたコインの相貌性を、対象知覚の位相に引き下ろすことを意味している。このように、この種の実験には〈相貌の測定〉というアポリアが常につきまとう。ここでの問題は、地平線上に出た満月を「ウァー大きなお月さまだ」と言ったのちに、腕を伸ばして手に持った五円玉の穴にその月がスッポリ収まってしまう時の《意外感》に集約されるだろう。

註6、H, Werner. "*Comparative Psychoby of Mental Development*" 1948. 邦訳「発達心理学入門」六八頁―八三頁

註7、「見る」にはもう一つの様態がある。われわれの行動はほとんど視覚に依拠してなされているから、私は「見ながら」行動していると いえる。けれども私はいちいち「―を見ている」と意識しながら行動しているわけではない。われわれの日常の「知覚」のほとんどは物の上に沈澱している既成の意味をひろいあげては次々にすべっていくだけの、意識の零点としての知覚である。このような主題化されない「見る」の様態を、さしあたって《地平的な「見る」》の様態と名付けておこう。この地平的な知覚が意識的になるとき対象知覚となるのである。

註8、このように知覚の相貌性を考えれば、そこに、「見られるもの」によって「見る者」が完全に虜になり圧倒されて金縛りになってしまう事態――たとえば各種のフェティシズムや事物恐怖症――なども包摂して考えていくことができるだろう。

註9、このような図―地関係については、拙論《現象学と心理学の接点》（「現代思想」フッサール特集号一九七八年）を参照されたい。

註10、邦訳『フロイト著作集6』一五五―一五七頁

註11、いわば、見られるものに対する暗黙の予料があって、いかなる態度をもってそれに臨むべきかをあらかじめまなざしに教えるような、「前望的な」働きがわれわれの内に宿っているわけである。

註12、この辺の事情については Helene Deutsch "*Psychology of Women*" 邦訳『母親の心理、1・2』（日本教文社）を参照されたい。

註13、邦訳『エクリI』（弘文堂）所収「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」ならびに『精神分析用語辞典』（みすず書房）の《鏡像段階》の項を参照。さらに、もっと広い視点からラカンの思想を紹介したものとして、『眼と精神』（みすず書房）に収録されているメルロ＝ポンティの「幼児の対人関係」一四七―一七〇頁の解説が非常にすぐれている。

註14、一般に、自分の周囲にいる重要な人物の認知に比べて、自分の像の認知はかなりおくれることが知られている。また母親像の認知については T. G. R. Bower "*Human Development* 1979. 参照。

註15、人格（ペルソナ）と仮面（ペルソナ）との関係については、坂部恵著『仮面の解釈学』（東大

出版）を参照されたい。

註16、子どもは四才前後になると、〈人から見られていると何もできない〉といった様子を示しはじめる。この段階では「見られること」より他者のまなざしそのものが実在論的な意味あいで気になるのであろうが、やがて自分が「見られるもの」でもあることをわきまえるようになってくる。

註17、いずれ子どもは一種のコペルニクス的転回を行なってパースペクティブの互換性を学んでいかなければならない。それはピアジェの脱中心化の思想がよく教えているところである。けれども、子どもがまずおのれを中心において世界を捉えるということの積極的、肯定的な意味を見失なってはならない。そのような点を本論のような文脈のなかで考えておくことは重要である。

註18、この点については、たとえば メラニー・クライン『羨望と感謝』（みすず書房）十〜五四頁を参照されたい。

（島根大学教育学部心理学研究室）